

経験から学ぶ教育手法としての プレイバックシアターワークショップの開催

保健福祉学部 吉川 ひろみ

はじめに

プレイバックシアターとは、台本も打合せもない即興劇である¹⁾。作業療学科で臨床実習経験の共有を目的としたセミナーで4年前から実施している。プレイバックシアターでは、自らの経験を話したり、自分から役をとったりすることが求められるので、アクティブラーニングの手法としても有効であると考えられる。プレイバックシアターには、公演とワークショップという2形態がある。公演では、トレーニングを受けた劇団員が、観客が語る感情や経験を即興劇として演じる。感情や経験を語った観客はテラーと呼ばれる。ワークショップでは、参加者が観客やテラーになるだけでなく、アクターとして演じたり、ミュージシャンとして音楽を奏でる。

プレイバックシアターが活用されている分野には、いじめ防止授業、企業内研修、対人援助職教育、人権イベント、患者会や家族会、コミュニティ形成、子育て支援、男女共同参画関連事業などがある²⁾。

目的

今回は、教員が教育手法としてプレイバックシアターを知ることと、ワークショップに参加した教員同士が、お互いの教育経験から学び合うことを目的とした。

通常のプレイバックシアターのワークショップは、①ソシオメトリー、②ウォームアップ、③演じる練習、④ストーリー、⑤振り返り、という順序で行われる。プレイバックシアターの独自性は、ストーリーと呼ばれる手法にある。ストーリーは、図1のような手順で行われる。写真は、観客の一人がテラーとなってコンダクターの隣の席に座り、テラーが語ったストーリーをアクターが演じるまでの場面である。

- | |
|---|
| 1. テラーがコンダクターの隣に座る |
| 2. コンダクターがテラーにインタビューする
アクターはテラーの経験(ストーリー)を聞く |
| 3. アクターが語ったストーリーを即興で演じる |
| 4. コンダクターがテラーの感想を聞く |
| 5. コンダクターがテラーを観客席に返す |



図1 主な手法であるストーリーの手順

方法

2016年12月19日の午後、本学広島キャンパスにおいて、3キャンパスから11名の教員が参加し3時間のワークショップを実施した。

同日の午前は、作業療法学科1年生30名を対象に、ソシオメトリー、ウォームアップ、演じる練習といったプレイバックシアターの手法を使った90分の授業を実施した。授業テーマは「自発性向上」で、学生が自ら考え判断して行動することが求められる内容だった。

講師には、スクール・オブ・プレイバックシアターの校長、宗像佳代氏と、同校講師で作業療法士の小森亜紀氏を招いた。

講師による指導スキルのポイントを図2に示した。

- 明確に指示を出す、デモンストレーションする
- 異なる指名の仕方により、自発性を促す
 - フリーチョイス:「誰でもどうぞ」
 - ハーフチョイス:「この辺の人どうでしょう」
 - ノーチョイス:「端から順番にやってみましょう」
- ネガティブな意見を大切にす
 - 多様性の確認
 - 誰もが排除されない雰囲気づくり
- 自発性と積極性は違う
 - 自発性は、規則がない、正解がない、即興的場面での行動

図2 具体的な指導スキル

結果

ワークショップに参加した教員全員が、FD研修として適切だった、参加してよかったと回答した。自由記載による感想から関連図を作成した(図3)。

自発性向上をテーマに実施した授業後の学生の感想は、自発性と積極性の違いがわかった、恥ずかしくて苦手だけど必要だと思った、やってみたら意外とできた、みんなの創造性がすごいと思った、最初より自発的になれた、などだった。

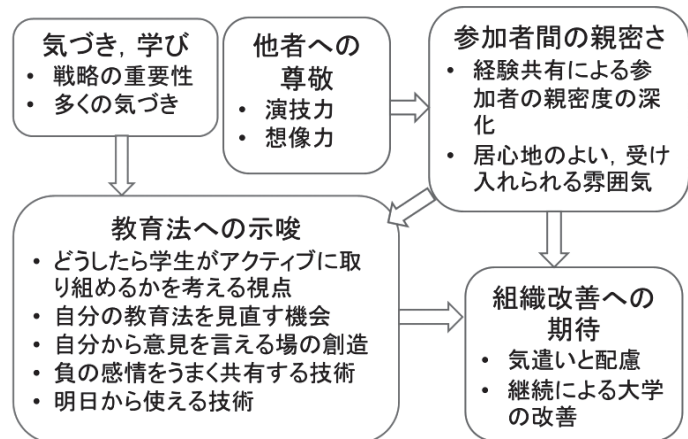


図3 教員の感想

まとめ

プレイバックシアターワークショップはFD研修として有用である。教員間の経験の共有として取り入れたい。学生の自発性向上の教育手法として、プレイバックシアターの指導スキルは有用である。グループワークやフィールドワークの経験の共有として取り入れたい。アクティブラーニングにおける自発性について考えることができる。形式を指定して学生の行動を求めることからの発展を期待したい。

文献

- 1) 宗像佳代 (2006). プレイバックシアター入門. 脚本のない即興劇. 明石書店.
- 2) 劇団プレイバックーズ. <http://www.playback-az.com/theme/edu-elementary.html>